

天地人

第13号 No.13

Jan 2011

ISSN 1882-3580



チベット住民は高所に適応したヤクとともに、限られた資源だが高度に応じた多様な生態環境を、最大限・持続的に利用してきた。チベット高原、拉古村（4100m）周辺は、氷河の雪解け水のもと、ゆたかな草原がみられ、ヤクも楽しそうだ。2006年10月15日奥宮清人撮影

Contents

地球温暖化防止へのローカル・イニシアティブ 植田和弘 — 2	防止地球温暖化的地方主动性 植田和弘 — 2	Local Initiative Toward the Prevention of Global Warming UETA, Kazuhiro — 2
書評：佐藤洋一郎監修『ユーラシア農耕史』全5巻 西谷大 — 4	书评：佐藤洋一郎監修《欧亚农耕史》（五卷本） 西谷大 — 4	Book Review: SATO, Yo-ichiro (ed.) "Agricultural History in Eurasia" NISHITANI, Masaru — 4
国際シンポジウム「西南中国の開発と環境・生業・健康」 松永光平 — 6	国际研讨会《西南中国的开发与环境、生计、健康》 松永光平 — 6	International Symposium on Development and Environment, Livelihood, and Health in Southwestern China MATSUNAGA, Kohei — 6
国際シンポジウムに参加して 門司和彦 — 7	参加国际研讨会 门司和彦 — 7	Participating in the International Symposium MOJI, Kazuhiko — 7
「西南中国の開発と環境・生業・健康」の中心思想と特色 包茂紅 — 7	“中国西南的开发与环境、生计、健康”国际研讨会的主题和特点 包茂紅 — 7	The Theme and Characteristic of the International Symposium on Development and Environment, Livelihood, and Health in Southwestern China BAO, Maohong — 7
雲南大学西南边疆少数民族研究中心の紹介 何明 — 8	云南大学西南边疆少数民族研究中心简介 何明 — 8	Introduction of the Center for Studies of Chinese Southwest's Borderland Ethnic Minorities of Yunnan University HE, Ming — 8
雲南のキノコ食について 湯本貴和 — 10	关于云南的蘑菇食用情况 汤本貴和 — 10	Yunnan Mushroom Dishes YUMOTO, Takakazu — 10
樹種同定と日中の木の文化 メヒティル・メルツ — 12	木材鑑定及中日木文化的研究 梅茜 — 12	Wood Identification and the Study of Wood Culture in China and Japan MERTZ, Mechtild — 12
環境の再生の「緑」を考える アラタンチムゲ — 14	反思环境再生的“绿色” 阿拉腾其木格 — 14	Distinguishing Shades of Green in Environmental Restoration Alatanqimuge — 14
研究会報告 — 16	研究会报告 — 16	Report of Workshop — 16

地球温暖化防止へのローカル・イニシアティブ



京都大学 植田和弘

現代は環境問題への取り組みを世界的に学び合う時代であり、小さな成功が世界的に大きく広がる可能性を持っている。ローカルな取り組みがグローバルな問題の解決に指針を与えてくれるかもしれないのである。

地球温暖化防止におけるローカルな取り組みを重視するには、いくつかの背景や原因がある。最も基本的なことは、気候変動問題はグローバル・イシューと言われるが、温室効果ガスの排出源はほぼすべてどこかの地域に存在し、そこで行われている活動だということである。つまり、ローカルな削減の積み重ねが初めて地球的規模での削減が可能になるのであり、突然グローバルに削減できるわけではない。

地球温暖化防止へのローカルな取り組みの重要性を中国の農村で実感したことがある。もう7、8年ほど前になるだろうか。中国の農村が温室効果ガスの削減に成果をあげていると聞いて訪問したときのことである。当時中国が国として地球温暖化防止に熱心に取り組んでいるとは言えなかった。国の地球温暖化対策がそうした段階で、しかもそれほど豊かとはいえない農村において、すでに温室効果ガスの排出削減に取り組んでいるということに興味を覚えた。同時に、温室効果ガスが削減できる経済的背景についても知りたいと思った。

その村で具体的に行っていることは、豚のし尿を回収しメタン醗酵させ、農家の調理や温水供給に使用する事業である。その事業の中心的担い手は、地方政府・エネルギー弁公室（日本流に言えばエネルギー課）主任の王さんであった。王さんは毎日のように農

家を訪問してはエネルギー問題の相談に乗っているが、その目的は温室効果ガスの削減ではない。農家にとってのエネルギー問題とは、エネルギーの安定供給を確保することとエネルギー使用に関わって生じる問題を解決することである。農村はまだ貧しく、家庭のエネルギー源には薪や練炭を使用していたが、使用時に有毒なガスが発生したり、煤で顔が真っ黒になるなどさまざまな問題が生じ、別のエネルギー源が模索されていた。そこで王さんは、その農村では養豚業を営む、ないしは家庭で豚を飼っている農家が多いことに着目し、豚の糞尿を集めメタン醗酵させ、そのメタンを各家庭において調理や温水供給に活用する新しいエネルギー源として供給するシステムづくりを推進していたのである。

この事業は、それまでは大気に放出されていたメタンを回収するのであるから、立派な温室効果ガス排出削減事業である。ただ事業には設備投資が必要で、一



豚糞尿システム：メタン回収がない場合（楠部孝誠氏撮影）



小規模メタン回収システム：（右）醗酵槽（左）ガスタンク（楠部孝誠氏撮影）

定の費用がかかるため、簡単にはすすまない。だからこそ、その事業の推進を世界的環境 NGO が支援しているのである。しかし、王さんはこの事業を地球温暖化防止のために始めたわけではない。王さんはエネルギー課の主任として、各農家のエネルギー事情を改善し村人の生活を良くするために取り組んでいるのである。そのことが結果として地球温暖化防止につながったのである。

王さんや農家と話をするにつれて、地球温暖化防止は人々の生活改善とあわせて取り組むことができれば成功しやすいし、そこでの地方政府の役割が大きいことに気づかされた。日本の温室効果ガス削減がすすまない一因は、地球温暖化防止へのローカルな取組みが

すすんでいないことにあるのではないか。そう言われてみると、日本の地方政府にはごみ減量対策室はあっても、エネルギー課を持って温室効果ガス削減に取り組んでいるところは少ないように思われる。エネルギー政策を分権化し、市民と地方政府が協働してエネルギー問題に取り組めるようにすることが必要ではないか。

地球温暖化防止というと、環境税や排出権取引制度が議論されがちであるが、そうした制度が効果を発揮するためにも、地域からの創意的な取組みが不可欠である。「地球的規模で考え、地域から行動する」と言われて久しい。地球温暖化防止へのローカル・イニシアティブを期待したい。

防止地球温暖化的地方主动性

京都大学 植田和弘

中国农村的沼气回收活动产生了减少温室效应气体排放的效果。这项活动之所以能开展下去，是由于它实实在在地改善了农民的生活，而且把削减温室效应气体与改善

农民生活结合了起来。推动这一活动的主导力量是地方政府，在能源问题上能让市民与地方政府携手付诸行动的当地主动性，是防止地球温暖化所必不可缺的。

Local Initiative Toward the Prevention of Global Warming

UETA, Kazuhiro

Kyoto University

The methane gas recovery business in agricultural communities in China has resulted in a reduction in greenhouse gas emissions. The reason why the business was able to proceed was that it provided a concrete improvement in the farmers' lifestyles and the improvement was linked to the reduction in

greenhouse gases. The regional administration played a large role in the promotion of the business and the incorporation of a local initiative wherein the local people and the regional administration cooperated proved to be indispensable in preventing global warming.

書評：佐藤洋一郎監修『ユーラシア農耕史』全5巻



国立歴史民俗博物館 西谷大

希有壮大な内容である。ユーラシアの1万年の農業と環境の関係史を、「ムギ農耕圏」、「モンスーン農耕圏」、及び「根栽類農耕圏」という3つの農耕風土にわけつつ、学際的視点から捉えなおし解き明かそうとする。さらに未来における農業のあり方まで模索することを視野にいれている。

人類の歴史は紆余曲折があったとしても、大きな枠組みでみれば右肩上がりの成長路線を突き進んできた。しかし今、私たちが直面しうろたえているのは、成長戦略を維持することそのものにも、どうやら問題があるらしいと気づいたからだろう。このような状況のなかで、さまざまな分野の研究者が「農業が環境を破壊するとき」というキーワードを共有し、農業が人類の食糧問題を解決しつつ環境破壊にも関わってきたのではないかという逆の視点から、再考しようとする点が斬新かつ刺激的である。

また失礼な言い方を許していただけるなら、この「ユーラシア農耕史」が一步間違えば「壮大なホラ」になるところを、「根拠のあるホラ」として読者を引きつけるのは、個別論文の多くが長年のフィールド調査などに基づいた、地を這うような地道で実証的な研究であり、また最新の発見が贅沢に盛り込まれているからである。

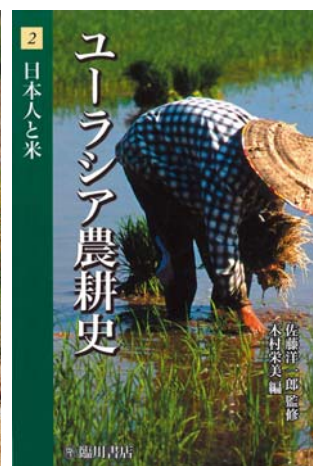
すべては紹介できないが、例えば「稲作と稲作文化」『ユーラシア農耕史の人びとと植物』では、河姆渡遺跡と同じ時代（約7000年～6500年前）の田螺山遺跡の研究成果が目をひく。田螺山遺跡では、確かにイネの種子も数多く出土しているのだが、ヒシの実やドングリのほうが圧倒的に多かったという。つまり長江流域では、田螺山遺跡の時代には、コメ作りが

はじまって数千年たったが、イネはまだその他の有用植物のなかの一つにすぎず、決して主流ではなかったのだという。中国新石器時代のとくに稲作地帯の生業イメージを大きく変える発見だといえる。また「中央ユーラシアの気候・水資源とその変遷」『砂漠・牧場の農耕と風土』では、中央ユーラシアで、人びとの生業を、気候の仕組み、気候の変動との関係性を通じて復元しつつ、農地開発の問題に言及している。この地域では、限られた水がキーワードであり、遊牧民は水資源にささえられた生態系を持続するために移動を繰り返し、反対にオアシスでは農耕がおこなわれてきた。人びとは環境の変化による水不足に応じて灌漑水路、地下水開発などの技術によって危機を乗り越えてきた。しかし、それは基本的には人間活動を拡大することで解決していたのだが、それも地球規模からみれば限界にきているという、重要な指摘である。

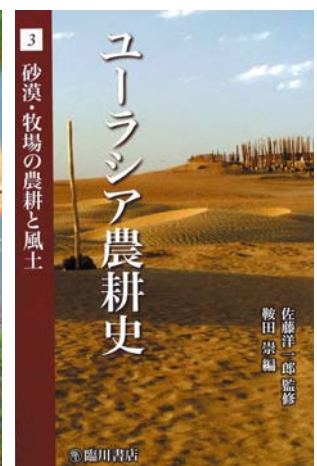
このシリーズに関わる研究は、現在進行中であり最終的な結論や提言はこれからだ。それを承知しつつ注文をつけるなら、地域研究のあり方である。ユーラシアという非常に広い範囲の研究は、「風土」と「農業形態」も異なり、それを明らかにすることはとても魅力的である。しかし全体としては地域間の比較という横軸の要素が強い印象をもつ。ある地域の1万年前から現在までの「農業と環境の関係史」という、徹底し



1巻



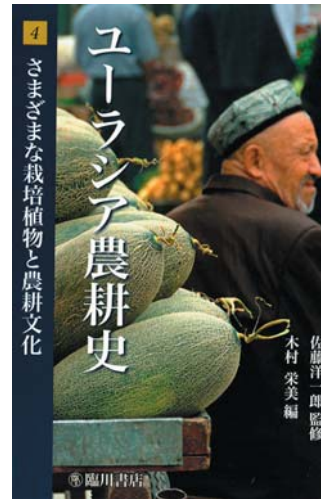
2巻



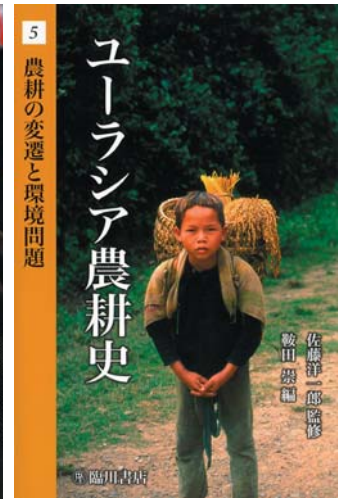
3巻

た縦軸の研究が一つでもあると、内容にさらに確からしさと深みが加わるのではないか。

もう一つの読後の漠然とした印象は、私たちが直面している問題は、結局のところ「増え続ける人口」と「止むことのない人間の欲望」に帰結するのではないかということである。問題解決には、これまで人類が繰り返してきたように「技術の革新」だけでは解決不可能だろう。しかし「人類が養ってきた過去のさまざまな知恵」で対処できるのか、研究代表者がおそらく最も主張したかったと推測する、私たち研究者の発想そのものもリセットして再構築する、そういう岐路にたっているように思える。



4 卷



5 卷

书评：佐藤洋一郎監修《欧亚农耕史》（五卷本）

国立历史民俗博物馆 西谷大

欧亚大陆一万年来的农业与环境关系史，可以划分为“小麦农耕圈”、“季风带农耕圈”与“根栽类农耕圈”等三种农耕环境，一方面从跨学科的角度来进行把握与揭示，同时还将探索未来农业模式纳入视野，站在人类发展历史的大框架下观察，可以看出农业呈现出不断增长的上升势头。

但我们现在应该察觉到这种维持成长的战略自身似乎出现了问题。在这种情况下，各个领域的研究人员正从农业解决人类粮食问题的同时也在破坏着环境，这一崭新的视点让人振奋。

Book Review: SATO, Yo-ichiro (ed.) “Agricultural History in Eurasia”

NISHITANI, Masaru

National Museum of Japanese History

The historical interaction between agriculture and the environment in Eurasia over the past 10,000 years was divided into three agricultural climates: the Mugi Agriculture Zone; the Monsoon Agriculture Zone; and the Vegeculture Zone, and examined from an interdisciplinary standpoint aimed at deciphering it in addition to extending it to encompass a search for the role of agriculture in the future. If the history of mankind is viewed within a large framework, it is evident that it has

followed a steady path of growth. However, we noticed that there may be a problem in sustaining the growth strategy in itself under current conditions. It is both novel and interesting that researchers in various fields have tried to reevaluate it by considering the inverse possibility that while agriculture has sought to solve the food problem, it may have contributed to actually destroying the environment.

国際シンポジウム 「西南中国の開発と環境・生業・健康」



総合地球環境学研究所・中国環境問題研究拠点 松永光平

中国環境問題研究拠点が中国の研究機関とともに毎年1回開催する国際シンポジウムが、「西南中国の開発と環境・生業・健康」と題して、雲南大学科学館において、2010年11月2日に開催された。地球研の「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクトは、環境と人間の健康の問題をともに解決する道を、地域の自然や歴史、文化を踏まえて探求する「エコヘルス」という新しい概念を提唱している。本シンポジウムでは、東南アジアとの経済統合を強めつつある「西南中国」に着目し、この地域の今後の環境・健康問題のあり方を、エコヘルス概念に基づく統合的アプローチにより議論し、西南中国の未来可能性を探求することを目的とした。

3つのセッションで、日中双方の報告者・討論者により、討論が行われた。第1セッション「歴史」では、西南中国における疾病対策の歴史からみた人間と環境の相互作用を取り上げた。報告では、現代においてマラリアと同一視されている「瘡」

「瘡」の意味が、各時代に独自の意味を持ち変遷してきたこと、また住血吸虫病について寄生虫を媒介する貝が発生しない環境を1950年以降、中国政府が大衆動員により作り上げた経緯が示された。

第2セッション「健康」では、経済発展にともなう、都市・農村に住む農民の健康問題を検討した。農村から都市や鉱山へ流動した農民工（出稼ぎ労働者）に着目した報告では、彼らの健康を守るために、行政や企業による健康管理のサービス提供や農民工への健康教育の拡充の必要性が述べられた。アジア各地における化学物質対策に関する報告では、換金作物の植え付けが栄養状態の改善に結びつく一方、農薬などの利用を通じて健康へのリスクを高めていることが示された。

第3セッション「生業」では、市場経済化にともなう生業転換が環境や地域住民の生活にもたらした変化について、中国とラオスの国境をはさんだ地域におけるゴム栽培農民の事例を題材に検討した。

環境への影響として、中国の哈尼族（ラオスではアカ族）の人々がラオスのアカ族村でゴム栽培を始めた結果、生物多様性の減少や土壌侵食をもたらしたこと、一方でゴムの枝が薪となり他の樹木の保全にも役立っていることが報告された。ゴム栽培と住民の収入増加との関連については、中国などの企業投資によりラオスでのゴム栽培が拡大しつつあるものの、制度の整備や労働力の確保が追い付かないために、多くの村では地域住民への利益還元が不足していることが指摘された。一方、ゴム生産のための土地利用計画策定や、中国企業と現地住民との価格交渉制度を地域住民自身が新たに作ることで、成功を収めたモン族（苗族）の村の事例も報告され、制度づくりの重要性が強調された。その後、日中両国の若手研究者によるポスターセッションにつづき、熱心な総合討論が行われた。

国際研讨会《西南中国的开发与环境、生计、健康》

総合地球環境学研究所中国環境問題研究基地 松永光平

由中国環境問題研究基地毎年舉辦一次的國際研討會，於11月2日在雲南大學召開。在該研討會上，對疾病對策的歷史、經濟開發引起的健康問題、中老邊境橡膠種植業帶來的生計轉換等方面進行了報告和討論。最後，在以上論

的基礎上，從日中兩國為實現生態健康需要做哪些工作、環境研究又應該做哪方面研究的這些觀點出發，進行了熱烈的綜合討論。

International Symposium on Development and Environment, Livelihood, and Health in Southwestern China

MATSUNAGA, Kohe
RIHN-China

An international symposium, which is held annually by RIHN-China, was held on 2 December at Yunnan University. There were reports and discussions on historical changes of the disease control, health problems caused by economic development, and rubber planting

in the border regions between China and Laos, etc. Finally, in light of the aforementioned discussions, there was a passionate comprehensive debate from the viewpoint of what environmental research should do and what is necessary with regard to realizing ecological health in China.

国際シンポジウムに参加して

総合地球環境学研究所 門司和彦



地球研の「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクトの中で雲南研究が他と異なる点は、カウンターパートが純粋な医学関連部局ではないことである。雲南には3名のキーパーソンがいる。

一人目は雲南大学民族研究院・生態環境人類学センターの尹紹亭先生。今回の国際シンポジウム中国側代表を務めてくださった。中国、特に雲南地方の生態人類学の権威で、地球研「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005」プロジェクト（秋道智彌リーダー）で雲南地方の30以上のコミュニティ研究を実施された。今後、この財産を活かして、共

同研究を実施する。

二人目は前・昆明医科大学教授で「雲南健康と発展研究会（YHDRA）」理事長の張開寧先生。YHDRAは医学関係者より社会学者が多く、開発と環境、生活と健康について人類生態学的研究を展開している。今回、東京大学の渡辺知保教授とともに「健康」のセッションで発表いただいた。YHDRAとはポスターで一部紹介した15村落の基礎調査を今年度中に終了し、来年以降、重点地域においてより深い共同研究を実施する。

三人目は雲南大学医学西南環境史研究センター長・教授の周瓊先生。歴史班の飯島渉・青山学院大学教授とともに

に雲南を中心としたマラリアや住血吸虫症の流行史・対策史研究を展開している。

地球研プロジェクトによって上記の3グループがつながり、開発と環境と健康の総合的な研究がスタートした。今回の国際シンポジウムはその大きな一歩となり、中国と日本の異分野の研究交流がスタートした。今後、これを「大メコン圏エコヘルス研究ネットワーク」に発展させていくことを日中の若い世代に託したい。

国際シンポジウムにご尽力いただいた中国環境問題研究拠点をはじめとする地球研の皆さま、中国側関係者に厚く御礼申し上げたい。

“中国西南の開発と環境、生計、健康”国際研討会の主題と特点

北京大学历史学系 包茂红



由日本総合地球環境学研究所和中国雲南大学西南边疆少数民族研究中心合作主办的国际研讨会于2010年11月2日在雲南大学科学馆举行，来自日本和中国各地的60多位学者围绕中国西南开发与环境问题、发表了6篇论文和14篇海报论文，从历史学、生态人类学、保健医学等方面展开了热烈讨论，取得了一些新研究成果。

开发不仅指生計方式从自給农业向商品经济的转型，还意味着大量农民从农村向城市的转移。环境既包括物理环境（physical environment），还包括景观和工作环境等“二次自然（second nature）”或“人工环境（human-made environment, built environment）”。在开发或生計和生活方式转型过程中，人们的生活和工作环境急剧变化，由此而产生自然疾病和职业病的泛滥。显然，这些疾病并不能

简单地被认为是单纯的医学问题，防治疾病除了需要建设完善的医疗保障体系之外，还特别需要改善环境，改变不合理的开发方式，实现人与环境的其他部分（the rest of environment）之间的和谐发展。这在一定程度上反映了本次会议主题的主要设计者門司和彦教授所倡导的“生态健康（ecohealth）”观。

本次研讨会呈现出三个鲜明的特点。第一，虽然会议题目是“中国西南的开发与環境、生計、健康”，但发表的论文并未局限在中国西南，实际上涉及的范围是季风亚洲。在讨论中，这个问题进一步被置于殖民帝国和全球的框架中来探讨。这在一定程度上反映了环境问题的地方性、国家性和全球性特点或者全球地方化（Glocalization）的特点。

第二，虽然参加研讨会的学者具有不同的学科背景，但大家都强调要进行

多学科的综合研究。环境问题确实是一个多学科的研究领域（multi-disciplinary arena），但是，多学科研究虽然能够呈现它的不同面相，但并不能呈现出它的有机整体性。从这个意义上讲，开发和環境研究需要自觉采用跨学科或交叉学科研究（transdisciplinary or transdisciplinary study）方法。

第三，参加会议的学者关注的问题虽然在历时性上有所不同，但都具有一个共同的取向，即希望为人类和地球的未来找到持续发展的可能性（futurability, sustainability）。尽管一次会议绝不可能完成这样一个宏大的任务，但是，如果各个学科、各个研讨会都具有这样的自觉意识，那么，在未来实现人类和地球的可持续发展并不是无望之谈。

总之，本次研讨会是一次立意高远、内容丰富、讨论热烈的学术会议。

云南大学西南边疆少数民族研究中心简介



云南大学边疆少数民族研究中心 何明

云南大学西南边疆少数民族研究中心是中国教育部设置在云南大学的全国百所人文社会科学重点研究基地之一。中心成立于2001年，下设魁阁研究室、民族关系与民族问题研究室、边疆问题与跨国民族研究室、少数民族非物质文化遗产研究室和影视人类学实验室5个分支机构和1个图书资料室，现有46位专兼职研究和日常工作管理人员。中心结合西南边疆少数民族经济社会发展实际以及各分支机构具体的研究宗旨，分别把中国西南少数民族发展史、中国西南民族关系、经济人类学与少数民族经济问题、发展人类学与少数民族地区文化产业、边疆民族政治、中国与东南亚国家的跨国民族、少数民族传统知识与非物质文化遗产以及影视人类学定为重点研究内容。西南边疆少数民族研究中心创办有《西南边疆民族研究》(核心刊物)、《民族学与人类学评论》(英文版)2份刊物，长年面向国内外高等院校和科研单位征集并刊登有关民族问题研究方面的优秀论文。由于期刊定位高，办刊宗旨切合少数民族地区的社会实际，从而使两份刊物在国内外均获得了较高的赞誉。2009年，在创办优秀刊物的基础上，西边中心又投入大量资金创建了“少数民族信息数据库”，采用现代化的网络技术将云南大学在新世纪初创建的10个少数民族小康示范研究基地基本的研究情况以图文并茂的形式上传中心网站，大大方便了国内外科研人员的学习和采鉴。同期，西边中心在原有梯队的基础上再次向省内外高等院校和科研机构聘请了20多位兼职研究人员。随着科研队伍的不断壮大，中心根据《普通高等学校人文社会科学重点研究基地建设计划》、《普通高等学校人文社会科学重点研究基地管

理办法》的文件精神，结合西南边疆少数民族研究中心的工作实际，又进一步深化了科研管理体制的改革，不仅所有专兼职研究人员与中心签定了正式合同，明确了各自的科研任务，而且中心日常管理人员也明细和规范了中心信息、档案管理等方面的具体职责分工，整体推进和完善了中心科学研究和管理水平。

近两年来，为了进一步扩展海外研究领域，西边中心又先后与联合国大学、日本京都大学、韩国首尔大学、台湾中央研究院、泰国清迈大学、越南社科院和文化大学等多家科研单位建立了长期合作研究关系，并与日本国立民族学博物馆、泰国清迈大学社会科学与可持续发展区域研究中心(RCSD)、联合国大学、越南社科院等多家合作单位分别举办了“中国西南及东南亚大陆的边疆、生计和区域化发展国际研讨会”、“山地生物多样性和文化多样性可持续发展国际研讨会”、“第三届中欧社会论坛T12a小组会议：族群认同、国家认同与人类认同”等7次国际性的学术会议，大大增进了合作双方的友谊和了解。中心的勃兴发展也引起国外更多学术机构的关注，在短短不到两年的时期里，西边中心就先后接待了来自日本、韩国、美国、英国、泰国、瑞典、墨西哥、越南等国的学者和官员。

中心管理体制的完善和海外平台的搭建为西边中心所有工作人员创造了良好的研究环境，团结、上进的科研队伍在中心任何明教授的带领下正务实有序地投入科研工作。截至目前，西边中心科研人员已组织申报并完成了“云南特困少数民族的社会转型与传统精神文化调适、西部大开发与云南跨境民族文化的多元发展研究、多民族国家族



西南边疆少数民族研究中心图书资料室



西南边疆少数民族研究中心影视实验室

际政治整合研究、东南亚民族史、全球化进程中的中国及东南亚傣泰民族文化多样性比较研究等涵盖国家、部级、福特基金等不同类型的 40 多项目科研课题。同时，西边中心还派出了 20 几位科研人员赴泰国、越南、缅甸等东南亚国家进行海外民族志田野调查，收悉的成果颇丰。结合科研人员的项目研究成果，中心已组织编写并向教育部等单位报送了 30 多期《工作简讯》和《成果简报》，并陆续资助出版了 50 多部著作。



中泰会议图片

雲南大学西南边疆少数民族研究中心の紹介

雲南大学西南边疆少数民族研究中心 何明

雲南大学西南边疆少数民族研究中心は、2001年に設立された。中国教育部が設置した全国100か所の人文社会科学重点研究拠点のうちのひとつである。魁閣研究室、民族関係与民族問題研究室、边疆問題与越境民族研究室、少数民族非物質文化遺産研究室、映像人類学実験室、図書資料室など、5つの部門と図書室で構成される。スタッ

フは19名である。主に中国西南少数民族(タイ族、ハニ族、ナシ族、チワン族、未識別の民族)、中国西南民族の関係、経済人類学と少数民族の経済問題、人類学と少数民族地域の文化産業の発展、边境学、民族政治学、中国と東南アジア国家の越境民族、少数民族の伝統知識・無形文化遺産と映像人類学などを研究している。

Introduction of the Center for Studies of Chinese Southwest's Borderland Ethnic Minorities of Yunnan University

HE, Ming

Center for Studies of Chinese Southwest's Borderland Ethnic Minorities, Yunnan University

The Center for Studies of Chinese Southwest's Borderland Ethnic Minorities of Yunnan University was established in 2001. It is one of the Key Research Bases for Humanities and Social Science which the Ministry of Education of the People's Republic of China is establishing in 100 locations throughout the country. Five research institutions including: the Kuige Research Office; Research Office of Ethnic Relations and Problems; Frontier Problems and Transborder Ethnic Groups Research Office; Non-materialistic Minority Cultural Assets Research Office; the Visual Anthropology Laboratory and the library are affiliated with the Center. There is currently a total of 19 staff members. Current research

topics are centering on: the ethnic minority groups in Southwestern China (in particular, the Tyigh, the Hani, the Naxi, the Bouxcuengh and unclassified ethnic groups); the relationships between the southwestern ethnic groups; anthropological economics and economic problems of the minority ethnic groups; anthropology and the development of cultural industries in the minority ethnic group regions; Boundary Studies; Ethnic Political Science; China and the transborder ethnic groups of China and Southeast Asia; pictorial anthropology and the non-materialistic cultural assets and traditional knowledge of minority ethnic groups; as well as on other areas.

雲南のキノコ食について



総合地球環境学研究所 湯本貴和

1960年代のおわりに中尾佐助や佐々木高明らによって提唱された照葉樹林帯文化論は、日本の基層文化をなす要素の多くが、雲南省からネパールにいたる東亜半月弧に起源を求めることができ、照葉樹林帯とよばれる常緑広葉樹林という共通の自然環境がその基層にあるとした。照葉樹林帯文化を特徴づけるのは、根栽類の水さらし利用、陸稲栽培、モチ食、麴酒や納豆などの発酵食品、鵜飼、漆器、絹、茶などの生業や食文化に加えて、歌垣や入れ墨などの民俗である。一方、東北日本を代表する夏緑樹林についても、落葉広葉樹林を自然環境とするブナ・ナラ帯文化といえる別系統の基層文化があり、堅果や山菜・キノコ利用、哺乳類の狩猟、サケ漁などで特徴づけることができ、朝鮮半島やロシア沿海州との間で地理的な広がりをもつ。

東北地方や甲信越地方で驚くのは、人々がキノコ狩りにかける情熱である。休日には多くの人々が、キノコを求めて森に入る。それに比べると、照葉樹林帯の人々のキノコに対する姿勢は冷淡といってもよい。わたしは、照葉樹林で食用キノコの利用が少ないのは、低緯度になるにつれて菌類の種多様性が増大し、食か毒かの区別がつかなくなるからだと考えている。もともとキノコには同定の手掛りになる特徴が少ない。キノコでは近縁種内でも食用になる種と有毒の種が混在するという、人間にとってきわめて厄介な性質をもっている。そのため、誤って毒キノコを食べる危険性が常に存在する。夏緑樹林帯では、決まった季節に大

量に出現するキノコを利用しているが、それでも中毒事故が毎年起こる。照葉樹林帯では夏緑樹林帯に比べて菌類そのものの種数は格段に多いが、屋久島ではシイタケとアラゲキクラゲ、奄美諸島の加計呂麻島でもシイタケ、アラゲキクラゲ、マツタケ、イグチの一種の4種以上の食茸を聞き出すことはできなかった。

そこで雲南のキノコである。雲南料理として有名なのは野生菌で、昆明にはキノコ鍋を名物とする店が軒を連ねている。照葉樹林帯文化のふるさどで、これはいかなることかという疑問を、わたしは長年にわたって抱いていた。2010年8月1日から7日まで、日本学術振興会・異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学推進事業「日本の環境思想と地球環境問題」(研究代表者: 秋道智彌・総合地球環境学研究所副所長)の一環として、兵庫県立大学の岡田真美子教授らとともに、雲南省の昆明および楚雄を訪問した。中国科学院昆明植物研究所の魯元学先生のご案内で、短期間であったが、キノコ食の季節としてはベストに近かった。

「雲南十大美味野生菌」なるものがあるという。鶏糞 (*Termitomyces albuminosa*= オオシロアリタケ: シロアリが培養する)、竹蓐 (*Dictyophora indusiata*= キヌガサタケ: 竹林に発生する)、松茸 (*Tricholoma matsutake*= マツタケ: 京都菌類研究所の山中勝次氏によれば、雲南やブータンのマツタケはDNAで同一種だが、常緑のコナラ属、マテバシイ属、シイ属な

どと菌根共生している)、干巴菌 (*Thelephora ganbajun*= イボタケ属の一種; マツ林に発生する)、牛肝菌 (*Boletus* spp. = イグチ属の複数種; この仲間は大部分が食用。マツやカシの森林に発生する外生菌根菌で、ヨーロッパではボルチーニやセップと称して好まれる)、青頭菌 (*Russula textilis*= ベニタケ属の一種; 樹林内に発生する外生菌根菌で薄緑色の傘が大きな特徴)、虎掌菌 (*Sarcodon imbricatus*= シシタケ; 乾燥させると強い香りを放つ)、羊肝菌 (*Morchella esculenta*= アミガサタケ; 日本ではあまり食用とされないが、フランスではモリーユといって有名食茸)、猴頭菌 (*Hericium erinaceum*= ヤマブシタケ; 立枯木に生える白色腐朽菌)、老人頭 (*Catathelasma ventricosum*= モミタケ; 針葉樹に外生菌根をつくる) である。こうしてみると、味もさることながら、形態的あるいは生態的に特徴があつて見誤ることがないキノコを選んでいのではないかと思いたくなる。ベニタケ属の見分けにくい種や、一部はたいへん美味だが、猛毒の種を含むテングタケ属 (*Amanita* spp.) などには含まれていない。滞在期間にかなり気をつけてみた食用キノコも、大部分はこれらの仲間か、栽培のキノコであった。

今回は、昆明のキノコ専門食堂と道端のキノコ売りを垣間みたにすぎないが、次回はずひキノコ採り名人と山に分け入りたいものである。

关于云南的蘑菇食用情况

综合地球环境学研究所 汤本贵和

对2010年8月1日至7日,在访问云南省昆明和楚雄之际,对食用野生蘑菇的利用情况进行了经验总结。在照叶林带,由于蘑菇的种类过多,很难区分哪些可以食用哪些有毒,因此

过去一直认为蘑菇食用较少。云南十大美味野生菌及访问期间所看到的野生蘑菇,除牛肝菌外,在形态或生态上均有明显的特征,较易区别于近邻品种。

Yunnan Mushroom Dishes

YUMOTO, Takakazu

RIHN

I summarized my experiences regarding the use of edible wild mushrooms observed in Kunming and Chuxiong when we visited Yunnan Province from August 1-7, 2010. I had a hypothesis that the diversity of mushrooms was so great in the laurel forest zone that it made differentiating the edible and poisonous ones

difficult, which would make them a minor dish. Among the top ten great delicious mushrooms of Yunnan Province and the wild fungi, I encountered during my stay, all had either morphological or ecologically conspicuous characteristics with the exception of the boletus and were readily distinguished from related species.



写真1 昆明のキノコ専門料理店のキノコ鍋の材料。上側左から、竹蓐、松茸、老人头。下側左から、金针菇 (*Flammulina velutipes*=エノキタケの栽培型)、牛肝菌、鶏油菌 (*Cantharellus cibarius*=アンズタケ)。下段の右に少しみえるのは、鶏糞。



写真2 昆明—楚雄間の国道沿いでみたキノコ売り。牛肝菌の各種。松茸、老人头などを売っていた。

Wood Identification and the Study of Wood Culture in China and Japan



MERTZ, Mechtild RIHN

The study and material analysis of sculptures, ancient buildings and excavated wooden remains contributes to the understanding of past human-nature relationships. Wood identification of Buddhist sculptures in Japan has more than 60 years of history. The knowledge of the wood species has now become general knowledge among Japanese art historians worldwide. As for excavated wooden remains, a survey of excavated wooden objects from Japanese archeological sites published in 1988 by Shimaji Ken and Itoh Takao examined 50,000 microscopically identified wooden artifacts. A revised edition including more than 250,000 wooden objects in more than 60,000 entries will soon be published by Itoh Takao conjointly with archaeologists led by Yamada Masahisa. Regarding architectural

wooden structures in Japan, various wood identification campaigns were undertaken by the Research Institute for Sustainable Humanosphere (former Wood Research Institute) of Kyoto University and the Nara Cultural Properties Research Institute. An example is the palace (Goten) of the Imperial Villa, Katsura Rikyū 桂離宮, Kyoto (built in 1615), led by Mitsutani Takumi. These examples show that in Japan, wood identification, often supported by the Ministry of Culture (Bunkachō), is an important research field widely accepted among human scientists. Wishing to extend

this approach to China, we undertook several wood identification campaigns.

The research on Chinese Buddhist sculptures based on wood identification has been undertaken since 2003 by the author together with Professor Itoh Takao at the Research Institute of Sustainable Humanosphere of Kyoto University. We analyzed the wood species of about 150 Buddhist and Deity sculptures from several western Asian art museums (Brussels, Cologne, Munich, Zurich, Paris, Cologne, Chicago [photos ① and ②], and New York), revealing that the wood species used in Chinese Buddhist sculptures (*Paulownia*, *Salix*, *Tilia*, *Populus*, and *Juniperus*) are completely different from those used in Japan (*Cinnamomum camphora*, *Chamaecyparis obtusa*, and *Torreya nucifera*). The Metropolitan Museum of Art recently published a catalog entitled “Wisdom Embodied: Chinese Buddhist and Daoist Sculpture in The Metropolitan Museum of Art” (2010), which contains our chapter on the wood analyses of 30 statues.

As for Chinese excavated wooden



① Watermoon Guanyin, Art Institute of Chicago Southern Song Dynasty (1129–1279), Size: H. =114.4 cm, D. = 97.8 cm, wood with polychromy and gilding



② Sampling. A sample is taken from a crack at the underside of the sculpture. The sample is mounted on a slide for microscopic identification. This sculpture was identified as being made of *Paulownia* sp./ キリ属.



③ Maitreya Hall, one of the 11 buildings of the Serkhang temple complex (gser rkang), Huang-nan, Jianzha county, Ngangla village 黄南尖扎县. All main pillars were identified as *Picea* sp./ トウヒ属



④ Landscape surrounding Ngangla village. On the 150km trip from Xining to the Serkhang temple all the hills and mountains seemed to be completely deforested

artifacts, 600 remains (ship parts tools, vessels, and even a sculpture) of the sunken fleet of Kublai Khan (1215-1294), from the second attack of Japan in 1281, have been unearthed along the coast of Takashima Island 鷹島 (Nagasaki prefecture). The samples were investigated by Mitsutani Takumi, Itoh Takao, myself, Pan Biao, and Luo Jianyan of Nanjing Forestry University. The main wood species of the ship timber were *Cinnamomum camphora*, *Ulmus*, *Cunninghamia lanceolata*, and *Pinus* subgen. *Diploxylon*, but a number of southeast Asian timber species were identified as well.

The identification of the wood species used in Chinese ancient buildings consisted of the investigation

of the Serkhang monastery (Qinghai province) [photo ③], temple and courtyard buildings of the Hutong area (Beijing), three temples in Lhasa, and the Sangiin Dalai monastery (Mongolia). We therefore cooperated with the Tibet Heritage Fund 西藏文化发展公益基金会 (THF), a nonprofit organization involved in the sustainable development of communities and traditional settlements within the Tibetan cultural realm. For the restoration of historic monuments, local people are trained in ancient techniques by a Tibetan chief carpenter. The wood identification of the Serkhang monastery (*Picea*, and *Pinus* subgen. *Diploxylon*) showed its timber usage since the 15th century. It allowed us to carefully select the appropriate timber for restoration as

well as to set off discussions on the natural environment as, at present, the surrounding hills and mountains are completely deforested [photo ④]. In the past, have the original logs been imported over the Yellow River, for example, or been cut in nearby forests?

Wood identification provides scientists from various fields with basic data that allow further investigation into various directions through an interdisciplinary approach. The knowledge of the wood species that possesses ancient cultural properties sheds light on human-nature relationships throughout history.

Tree names

<i>Picea</i> sp.	spruce	トウヒ属	云杉属
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	two-leaved pine	二葉マツ	二针松
<i>Paulownia</i> sp.	paulownia, foxglove tree	キリ属	泡桐属

樹種同定と日中の木の文化

総合地球環境学研究所 メヒティル・メルツ

60年以上、日本の学者は、樹種を同定しながら仏像彫刻を研究してきた。中国の木の文化をより深く知るため、筆者はこの研究を、欧米の美術館に保存された150の中国の仏教彫刻や中国の古代の建物、鷹島（長崎県）の隣で発掘されたクビライの沈没の艦隊のような木製遺物まで広げた。これらのデータから、我々は、古代の人々の

木材選択の条件を知ることができる。技術・歴史・文化・地理・生態・環境の観点から、中国と日本との違いも考察できる。たとえば、現地調達または貿易を通じた木材の獲得などの生業活動は、特定の地域において木材が利用できるかどうかや、環境の変化を反映している。

木材鑑定及中日木文化的研究

総合地球環境学研究所 梅茜

日本学者通过鉴定树种来研究佛教雕刻，已有60年以上的历史。为了了解中国的树木文化，笔者将这种研究手段扩展到欧美各国美术馆保存的150件中国佛教雕刻、中国古代建筑、以及在日本鹰岛（长崎县）附近挖掘的，可能是元朝忽必烈时期沉舰的木制遗物。通过这些数据，我

们可以了解古人选择木材的条件。还从技术、历史、文化、地理、生态、环境的角度出发，考察了中国与日本的不同之处。例如，通过当地采购或通过贸易来获取木材等经济活动，反映出特定地区木材的可利用性与环境的变化。

環境の再生の「緑」を考える



千葉大学大学院人文社会科学研究所 アラタンチュムゲ

中国内モンゴル自治区ダラタ（達拉特）旗は、黄河が大きく湾曲したところに位置し、クブチ沙漠が真ん中に広がっている。しかし、その沙漠の周辺は、かつて泉が並び、馬に乗った人が入っても見えないほど

高く多様な草本植物や灌木が生い茂り、野生動物や家畜が多数入り混じる美しい草原だったと現地の人々は言う。

しかし、1950年代末期から、この美しい草原は移住農民によって大

規模な開墾と薬草や灌木の乱獲にさらされた。一見豊かに見えた草原は、表土が薄く、脆弱だったため、あっという間に破壊された。他方で、黄河沿岸部を中心に灌漑による農業開発が実施され、1989年になると国家の食糧重点地に指定された。その結果、土地のアルカリ化がもたらされた。

激しい草原破壊が進行する一方で、当該地域を対象とする植林活動が1950年代末期からはじまっている。文化大革命により一時後退するが、1978年には中国の「三北」防風林建設の対象地区になる。その後、1986年には内モンゴル自治区の植林重点地に指定されている。1999年までの植林面積は、実に3839.992 km² (5759988 ムー)にのぼる。特に、2000年から中国政府の生態建設プロジェクトが相次いで実施され、ダラタ旗では、第四期の「三北」防風林や退耕還林・天然林の保護など一連の生態建設プロジェクトが実施され、総額3億860万元が投資された。

ダラタ旗は内モンゴルでも、外国からの植林援助をいち早く受けている。遠山正瑛氏が1990年ダラタ旗の恩格貝を緑化対象にした「沙漠緑化実践協会」を設立したのを皮切りに、2008年までに日本からの資金援助や9320名の植林ボランティア参加によって、ポプラを中心に314万6566本が植林されている。その影響で新城村というところでも、2001年から、日中青年緑化交流基金（小淵基金）が1億円かけて中華全国青年連合会や日本



ダラタ旗エンケイブイ（恩格貝）の砂丘の低地：現地の人々に牧草地として活用されている



植林の聖地「恩格貝」：日本人によって造られた「緑」によって地下水の低下が深刻化している

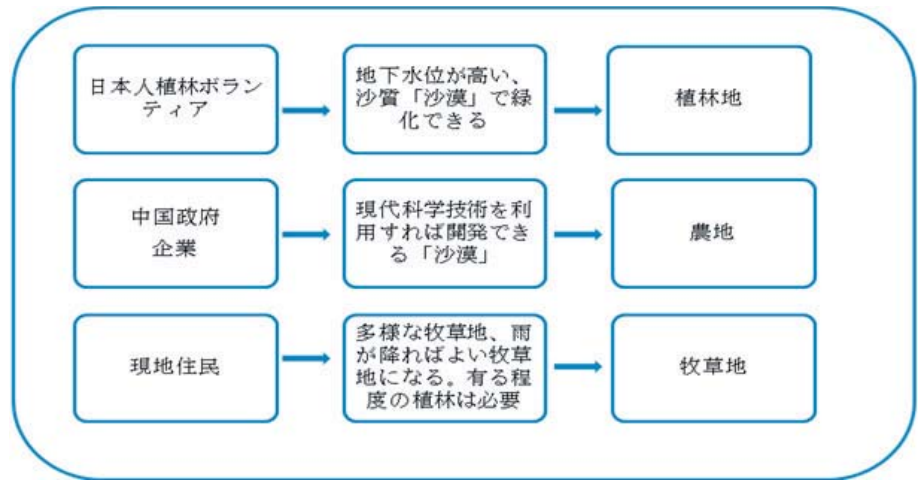
青年団協議会によるクブチ沙漠生態防風林を造成した。

以上のように、何十年間の植林緑化によって、高木の防風林に囲まれた農地や沙漠の辺縁地帯に人工的に林が作り出され、ダラタ旗の森林被覆率は1949年の0.4%から2008年の23.1%までに増えた。しかし、植林活動によって本来の美しい草原生態系を再生することはできず、地下水の低下や野生動物の絶滅、生物多様性の喪失という新しい「沙漠化」を引き起こしている。現地の老人は「過去の故郷が心に広がってくる。美しかった。今は何もない」と語る。

緑化を主導する政府、研究者たちは、植林し「農地」を作ること「緑」と考えている。日本人のNPOは植林して「森」にすることを「緑」と考えている。こうして、地域の独特な自然環境とその文化が正しく認識されず、植林さえすれば緑化になるという思想のもとで、環境再生が行われてきた。これは環境再生が「沙漠」を緑化するという一方で、「沙漠」の概念が一方的に構築されたことを示すものである。



破壊されつつある現地モンゴル人にとっての緑



ダラタ旗エンケイブイは外部の人達に「沙漠」とイメージされ緑化開発の対象になっている

反思环境再生的“绿色”

千叶大学大学院人文社会科学部 阿拉腾其木格

在中国库布齐沙漠周边地区进行的绿化活动中政府、科研人员、植树志愿者等机构和人员起着主导作用。他们

单方面的认为只要植树就能绿化环境。而这样的错误认识却成为了当地绿化思想的主流。

Distinguishing Shades of Green in Environmental Restoration

Alatanqimuge

Global School of Humanities and Social Sciences, Chiba University

Afforestation in the Kubuqi desert, Inner Mongolia, China, is socially constructed by the leading government, researcher and volunteer communities as “environmental restoration” because these actors see planting trees as equivalent to afforestation, and

afforestation as ecologically desirable. A more common perception of local inhabitants is that grasslands, which are often seen by “restoration” actors as sites for afforestation, provide greater ecological and livelihood benefits to local populations.

中国環境問題研究拠点では以下のワークショップ・研究会を開催しました。

第 8 回中国環境問題ワークショップ
(2010 年 7 月 8 日；総合地球環境学研究所)
中国の環境ガバナンス
報告 包茂紅
(地球研招へい外国人研究員、北京大学歴史学系)
コメンテーター 北川秀樹 (龍谷大学法学部)

中国では、計画経済期の初期においてはソ連式の重工業優先の開発にともない大気や水の汚染が生じた。つづいて、中国政府主導の大躍進運動や三線建設により水土流失や大気汚染が拡大した。改革開放以降は、対外貿易の拡大により経済成長を享受する一方、国内で環境問題の悪化に直面してきた。このような状況に対して、中国は 1970 年代以降、中央政府が主導して法律の整備などに取り組んできた。しかし、地方政府が経済発展を優先して汚染源の企業を保護することが、環境問題解決の障害の一つとなっている。

第 20 回中国環境問題研究会
(2010 年 5 月 19 日；総合地球環境学研究所)
中国西南部と大陸部東南アジアを結ぶ人・モノのネットワーク
報告 クリスチャン・ダニエルス
(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
コメンテーター 西谷大 (国立歴史民俗博物館)

中国の国家政策や対インド戦略などを視野に入れながら、雲南とミャンマー・ラオスとの人・モノのネットワークがどのように変化しているのか、考察した。今世紀、中国西南部、特に雲南省と、隣接する東南アジア大陸部との間に人の往来と物流が盛んになりつつあり、ミャンマー北部とラオス北部では住民の生活が中国市場に徐々に依存するようになってきた。その背景には中国の経済成長があり、中国の企業が市場開拓と資源獲得のため、積極的に活動を展開している。

第 21 回中国環境問題研究会
(2010 年 9 月 22 日；総合地球環境学研究所)
中国と東南アジアの生業転換と健康影響
報告 渡辺知保 (東京大学大学院医学系研究科)
コメンテーター 渡部久実
(琉球大学熱帯生物圏研究センター)

中国と東南アジア諸国の農村部において、自給自足型の農耕から、換金作物の栽培や農業以外の生業への転換が進んでいる。この生業転換が、現地住民の農薬など化学物質への曝露状況にどのような影響を与えたか、健康影響の可能性も含めて考察した。生業転換に起因する化学物質曝露の程度は集団内部においても一様ではなく、男女差などが見られた。こうした集団内の不均一性が今後どのように展開していくのか、今後も注目していく必要がある。

第 22 回中国環境問題研究会
(2010 年 10 月 22 日；総合地球環境学研究所)
メコン川を巡るハイドロポリティクス
- 中国と下流諸国との関係 -
報告 中山幹康
(東京大学大学院新領域創成科学研究科)
コメンテーター 渡邊紹裕 (総合地球環境学研究所)

メコン川をめぐる水資源等の問題に関して、中国と下流各国との国際関係の面から考察した。一般に、中国は、「下流国に何の相談もなく」メコン川の上流部で多数のダムを立案・建設するなど、「最上流に位置する地域の覇権国」として振る舞っているとされる。しかし実態として、大メコン川流域圏として経済統合が進みつつあるなか、中国は大きなマーケットである下流国に対して、「最上流に位置する地域の覇権国」としては振る舞い得ない。中国はメコン川委員会には非加盟であるものの、それ以外の枠組みにおいてもメコン川上流の水資源開発に関して対話を行っている。こうした中国の対応に対し、下流国であるタイやカンボジアの環境大臣らは積極的な評価を与えている。

発行日 2011 年 1 月 25 日

編集・発行

中国環境問題研究拠点

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

総合地球環境学研究所

TEL 075-707-2462 FAX 075-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

製作・勉強出版

Date of Issue 25 Jan, 2011

Edited and Published by

RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues

457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto, 603-8047 Japan

Research Institute for Humanity and Nature

TEL : +81-75-707-2462 FAX : +81-75-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

Produced by BENSEY PUBLISHING INC.